

令和4年8月31日
農推第1210-5号

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

特に注意！（9月）

水稲：斑点米カメムシ類

アカヒゲホソミドリ
カスミカメ

特徴

- ◆ アカヒゲホソミドリカスミカメ（別名：イネホソミドリカスミカメ）、アカスジカスミカメ、ホソハリカメムシ等が加害する。
- ◆ 畦畔のイネ科雑草等から出穂した水田に飛来し、乳熟期の粃を吸汁加害する。

防除のポイント

- ◆ 出穂前後10日以内の畦畔除草は斑点米カメムシ類を水田に追い込むため行わない。
- ◆ 発生が多い場合は、穂揃期（出穂後2～3日頃）および乳熟初期（出穂後10日頃）に**トレボン乳剤**、**キラップ粒剤**、**スタークル（アルバリン）粒剤**等を散布する。

参照：病害虫防除情報 [http://www.jppn.ne.jp/osaka/R4th/boujiyojyouhou/2208_bojo05\(hantenmai_kamemusi\).pdf](http://www.jppn.ne.jp/osaka/R4th/boujiyojyouhou/2208_bojo05(hantenmai_kamemusi).pdf)

果樹類：果樹カメムシ類



チャバネアオカメムシ

特徴

- ◆ チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ等が加害する。

防除のポイント

- ◆ 発生量や加害時期は年、ほ場により変動するので、カメムシ類の活動が活発になる夕方に園内を見回り、飛来を確認したら、速やかに薬剤散布を行う。
- ◆ 発生を認めたら、**スタークル／アルバリン顆粒水溶剤**（かんきつ、かき、なし等）、**アディオン乳剤**（かんきつ、かき、なし等）等を散布する。多発時には、残効性が比較的高いピレスロイド系薬剤、ネオニコチノイド系薬剤を中心に散布する。
- ◆ 薬剤散布は夕方か早朝に行くと効果的である。

野菜・花き類



シロイチモジヨトウ

特徴

- ◆ ねぎでの発生が多いが、その他しゅんぎく、ナス科野菜、アブラナ科野菜、豆類、きく、花き類等多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ 発生初期（若齢幼虫期）に防除を徹底する。卵塊や集団にいる幼虫の除去に努める。
- ◆ 発生を認めたら、**ユテツフロアブル**（ねぎ等）、**ロムダンフロアブル**（ねぎ、花き類・観葉植物等）、**プレオフロアブル**（ねぎ等）等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

野菜・花き類



オオタバコガ

特徴

- ◆ 果実や茎などに食入する。食害痕のまわりに虫糞が確認されることが多い。

防除のポイント

- ◆ 果実の食入孔の中にいるため薬剤がかかりにくく、さらに老齢幼虫には薬剤の効果落ちるため、捕殺等も含めて早めに対応する。
- ◆ 発生を認めたら、**プレバソフロアブル5**（なす、トマト、ミニトマト、とうもろこし等）、**スピノエース顆粒水和剤**（なす、トマト、ミニトマト、きく等）等を散布する。

次回の情報は9月下旬にお知らせします。

◎「防除指針」 <http://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>

※農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

病害虫の発生予報(9月)

品目	程度 少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
水稲			いもち病		
			紋枯病		
	ジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)(発生に注意)				
			トビイロウンカ		
			斑点米カメムシ		
			ヒメトビウンカ		
ぶどう	べと病				
	褐斑病				
	晩腐病				
			チャノキイロ アザミウマ		
			フタテン ヒメヨコバイ		
バラ科 果樹	クビアカツヤカミキリ(発生に注意)				
みかん			黒点病		
				ミカンハダニ	
			ミカンサビダニ		
果樹類 全般	果樹カメムシ類				
なす			褐紋病		
				うどんこ病	
			アザミウマ類		
きゅうり			べと病		
			うどんこ病		
			褐斑病		
			ウリノメイガ		
			ミナミキイロアザミウマ		
	黄化えそ病(発生に注意)				
			コナジラミ類		
退緑黄化病(発生に注意)					
花き(きく)				黒斑病・褐斑病	
			白さび病		
			アザミウマ類		
野菜・ 花き類				シロイチモジ ヨトウ	
			ハスモンヨトウ		
			コナガ		
	オオタバコガ				
			アブラムシ類		

水稲

いもち病



葉いもち



穂いもち

特徴

- ◆ いもち病は育苗期から成熟期まで発生する。発病部位によって、育苗中期～分けつ期の葉いもちと出穂後の穂いもち、節いもち等がある。
- ◆ 気温25～28℃、多湿で日照不足の時に多発し、降雨、チッソ過多、過繁茂等の場合に発病が助長される。

防除のポイント

- ◆ 特に上位3葉に葉いもち病斑があり、降雨があると穂いもちに移行しやすいので、降雨が続く場合は**ブラシフロアブル**等を散布する。

紋枯病



紋枯病発病株

特徴

- ◆ 高温（28～32℃）、多湿時に多発する。
- ◆ チッソ過多、密植、分けつ過多で発病が助長される。
- ◆ キヌヒカリ、きぬむすめは抵抗性が弱いので注意。

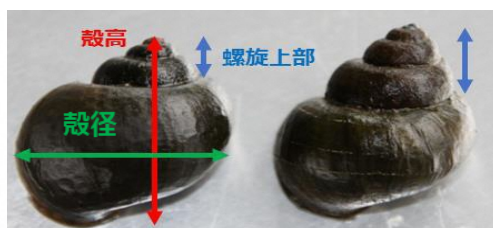
防除のポイント

- ◆ 過繁茂にならないようにする。
- ◆ 発生を認めたら**バリダシン液剤5**等を散布する。

ジャンボタニシ（スクミリンゴガイ）



ジャンボタニシ
(スクミリンゴガイ)



ジャンボタニシ

マルタニシ



ヒメタニシ

注)当該項目「ジャンボタニシ（スクミリンゴガイ）」の写真は、農林水産省リーフレット「ジャンボタニシによる水稲の被害を防ぐために」より引用。

特徴

- ◆ 成員の殻高は2～7cm程度。
- ◆ 他のタニシ類に比較して、**螺旋上部の長さが短く、殻径と殻高がほぼ同じである（上部写真参考）。**
- ◆ 主に田植え直後（約20日後まで）の苗が食害され、欠株になる。

防除のポイント



ジャンボタニシ卵塊

- ◆ 来年の発生を抑制するために水田や水路の成員を拾い取るとともに、卵塊を除去する。

カラー技術資料「ジャンボタニシ（スクミリンゴガイ）から稲を守りましょう！」
についてもご参照ください。

<http://www.jppn.ne.jp/osaka/color/tanishi/tanishi2017.pdf>

●病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)

●農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

トビイロウンカ



トビイロウンカ成虫



トビイロウンカ幼虫



トビイロウンカによる坪枯れ症状

現在の発生状況

- ◆ 南河内地域の予察灯で6月中下旬、7月上中旬、8月上中旬に数頭ずつ捕殺を確認した。府南部には一定数の飛来があったとみられる。巡回調査では本田での発生は確認していない。

特徴

- ◆ 6月下旬～7月上旬の梅雨時期に中国大陸から長翅型成虫（飛来世代）が日本に飛来する。
- ◆ 水田に着地したトビイロウンカは分けつ期のイネの株元に住み着き、茎の表面に産卵する。
- ◆ 卵は1週間ほどで孵化し、幼虫（第1世代）は親と同じくイネの株元で、その師管液を吸汁して成長する。その後、数回の脱皮を経て成虫となる。第2世代、第3世代が繁殖し、出穂期以降に多発すると坪枯れを起こし甚大な被害が出ることがある。

防除のポイント

- ◆ トビイロウンカは稲の株元（水際）に生息するので、稲の株元を叩く等して発生しているかを確認する。
- ◆ 1株あたり1頭以上の発生が見られたら、エクシードフロアブル、エミリアフロアブル、スタークル／アルバリン粒剤等を株元まで十分薬剤が行き渡るよう注意して散布する。

詳細は、病害虫カラー技術資料

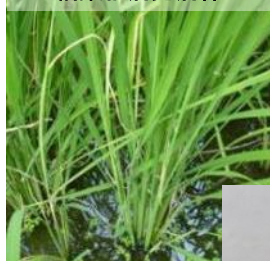
「水稲 トビイロウンカの防除 改訂版 R4.3」を参照してください。
http://www.jppn.ne.jp/osaka/color/tobiironka/R4tobiironka_manual.pdf

ヒメトビウンカ（縞葉枯病を媒介）

ヒメトビウンカ(長翅型)



縞葉枯病発病株



ヒメトビウンカ(短翅型)

特徴

- ◆ ヒメトビウンカはトビイロウンカやセジロウンカと異なり、イネ以外の植物でも生息でき、ほ場周辺で4齢幼虫が越冬する。
- ◆ 吸汁被害は大きくないが、縞葉枯病ウィルスを媒介する。
- ◆ 縞葉枯病り病株では、新葉が垂れ下がって枯死する（ゆうれい症状）。

防除のポイント

- ◆ 発生が多い場合は、上記トビイロウンカに準じて薬剤散布を行う。
- ◆ ヒメトビウンカが増殖しないように水稲収穫後、水田を耕起し、ひこばえを絶やすとともに、畦畔や休耕田等の寄生植物となるイネ科雑草を枯死させる。

●病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
[\(http://www.jppn.ne.jp/osaka/\)](http://www.jppn.ne.jp/osaka/)

●農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

果樹

ぶどう

べと病



べと病被害葉

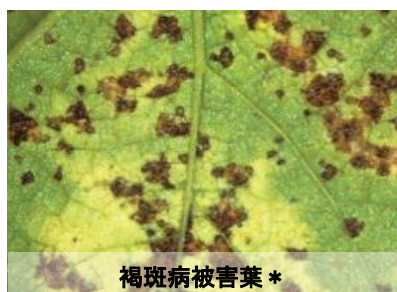
特徴

- ◆ 露地栽培では、雨が続くとまん延しやすい。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら被害葉を速やかに取り除くとともに、エトフィンフロアブル、レーバスフロアブル等を散布する。なお、収穫前日数をよく確認してから使用する。
- ◆ 農薬を散布する際は、薬害や果実の汚れを避けるため、傘・袋かけ後は棚上散布を行う。
- ◆ 収穫後にICボルドー66D、ICボルドー48Q等を散布する。
注) デラウェアでは66D、巨峰系品種では48Qを使用する。

褐斑病



褐斑病被害葉*

特徴

- ◆ 米国系品種に弱い品種が多く、デラウェア等に発生が多い。
- ◆ 多発すると早期落葉し、果実の着色が不良となる。

防除のポイント

- ◆ 枯枝や落葉、被害葉は取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 発生を認めたら、オンリーワンフロアブル、ネクスターフロアブル、フルーツセイバー等を散布する。なお、収穫前日数をよく確認してから使用する。
注) ネクスターフロアブル、フルーツセイバーを幼果期以降に使用する場合は、果粉溶脱を生じるおそれがあるので注意する。

晩腐病



晩腐病被害果※

特徴

- ◆ 糖度が高くなった収穫間際の果実に発生しやすい。
- ◆ 露地デラウェアに発生が多く、病原菌は結果母枝、巻きひげ等で越冬する。

防除のポイント

- ◆ 被害果房や巻きつるは取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 発生が多かった園では、収穫後にICボルドー66D等を散布する。

チャノキイロアザミウマ



チャノキイロアザミウマ
被害果*

特徴

- ◆ 巨峰、シャインマスカット等の大粒系品種で被害が大きいので注意する。

防除のポイント

- ◆ **ディアナWDG**、**ヨーバルフロアブル**等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

フタテンヒメヨコバイ



フタテンヒメヨコバイの被害 *

特徴

- ◆ 葉の裏側から吸汁する。被害部分は色が白く抜ける。

防除のポイント

- ◆ 園周辺の草むらや落葉下で多く越冬するので、周囲の除草や清掃に努める。
- ◆ 発生に注意し、被害の初期に防除する。
- ◆ **スタークル/アルパリン顆粒水溶剤**、**ダントツ水溶剤**等を散布する。

バラ科果樹(もも、うめ、すもも等)

クビアカツヤカミキリ



特徴

- ◆成虫は体長2～4 cm。前胸部は明赤色で、全体は光沢ある黒色。成虫は6～8月頃に出現。
- ◆幼虫は樹木内部を食い荒らし、枯死させる。3月下旬から中華麺～うどん状のフラス(木くず等の混合物)を出す。
- ◆フラスが出ている穴の周辺に幼虫がいる可能性が高い。
- ◆若齢幼虫はうどんよりも細い(中華麺状)フラスを出すことがあり、この時期の防除が効果的。



被害枝



ネット被覆(さくら)

防除のポイント

- ◆フラスが見られた樹は、ネットを巻き付ける等成虫の拡散を防ぐ対策をとる。ネットは4mm目合いのものを、高さ2m程度まで2重に口をしっかりと巻く。ネットを樹幹に密着させると成虫がネットを噛み切ることがあるので、樹幹との間に余裕を持たせる。
- ◆ネット被覆している場合は、ネット内での交尾・産卵を防ぐため、定期的にネット内を確認し、成虫を見つけしだいハンマー等で殺虫する。
- ◆伐採後の切り株についても、ネットやビニルシート等で2重に覆い、成虫が拡散することを防ぐ。
- ◆フラスを見つけたら、干枚通しや針金等を穴に入れ、中のフラスをかき出してからロビンフッド、ベニカカミキリムシエアゾールを注入するか、幼虫を突き刺して殺虫する。

詳細は、病害虫カラー技術資料

「クビアカツヤカミキリの生態と防除対策 改訂版 R3.12」を参照してください。

http://www.jppn.ne.jp/osaka/color/Aromia_bungii/kubiaka2112V2.pdf

●病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)

●農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

温州みかん

黒点病



黒点病被害果

特徴

- ◆ 雨が続くと発生が増加する。

防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期（梅雨期、秋雨期）に、ジマンダイセン／ペンコゼブ水和剤、ストロビードライフフロアブル等を散布する。
- ◆ 感染源の枯枝は切り取り、園外に持ち出し処分する。
注1）ジマンダイセン／ペンコゼブ水和剤を使用する場合は、皮膚のかぶれに注意する。
注2）かんきつ（みかんを除く）では、ジマンダイセン／ペンコゼブ水和剤の使用時期が「収穫90日前まで」なので使用時に注意する。

ミカンハダニ



ミカンハダニ被害葉

特徴

- ◆ 葉に寄生して吸汁するため、吸われた部分は色が抜けて白くなる。多発すると落葉が早まる。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、ダニコングフロアブル、スターマイトプラスフロアブル、ダニエモンフロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ◆ 薬液は葉裏にもよくかかるように散布する。

ミカンサビダニ



ミカンサビダニ被害果*

特徴

- ◆ 梅雨明け後に発生が多くなりやすい。

防除のポイント

- ◆ 近年、9月になってから多発する場合がある。7月に薬剤を散布しても被害が発生するほ場では、9月上～中旬にコテツフロアブル、ダニエモンフロアブル、ハチハチフロアブル等を再度散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

いちじく

疫病



疫病被害果*

特徴

- ◆ 果実に緑色水浸状斑点ができ、やがて暗紫色、円型でくぼんだ病斑になり、白色のカビで覆われる。
- ◆ 雨水の跳ね上がり等で伝染するので、秋の長雨の時期に発生が多い。

防除のポイント

- ◆ 敷わらやポリマルチ等により雨滴のはね上がりを防ぐ。
- ◆ 被害葉や被害果は、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、Zボルドーを散布する。発生を認めたら、ランマンフロアブル、レーバスフロアブル、アミスター10フロアブル等を散布する。

●病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)

●農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

野菜

なす

褐紋病



褐紋病被害葉



褐紋病被害果*

特徴

- ◆ 葉や茎に褐色の病斑ができる。果実では褐色で円形の斑点ができ、進展すると腐敗する。さらに病状が進むと柄子殻という小さな黒点を形成する。
- ◆ 特に露地の水なすで発生しやすい。
- ◆ 梅雨時期から発生し、盛夏過ぎから被害が増える傾向にある。
- ◆ 病原菌は被害植物とともに土壤中に残り、次作の伝染源となる。

防除のポイント

- ◆ ほ場内の排水や風通しを良くし、湿度を上げない。
- ◆ 発生を認めたら直ちに発病部位を取り除き、ほ場外に持ち出して処分するとともに、ベンレート水和剤、スクレアフロアブルを散布する。
- ◆ 被害が発生したほ場では連作を避ける。
- ◆ 収穫後の種取りは、褐紋病の発生していないほ場や株から行う。

うどんこ病



葉の病斑

特徴

- ◆ チッソ過多で気温が25～28℃、湿度が50～80%で日照不足が続くと発生しやすい。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、パンチョTF顆粒水和剤、スコア顆粒水和剤、プロパティフロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

アザミウマ類



ミナミキイロアザミウマ成虫※

特徴

- ◆ 苗からの持ち込みによる発生がみられることがある。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、アフーム乳剤、ファインセーブフロアブル、モベントフロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。
- ◆ 雑草はアザミウマ類の生息場所となるため、ほ場内および周辺の除草を行う。

●病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)

●農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

※原図：(地独)大阪府立環境農林水産総合研究所

*原図：大阪府園芸植物病害虫図鑑(大阪府植物防疫協会)

きゅうり（施設抑制裁培）

べと病



べと病*

特徴

- ◆ 気温20～24℃で発生が多い。

防除のポイント

- ◆ 排水を良好にし、過湿を避ける。
- ◆ 施設栽培では換気に注意し、結露を避ける。
- ◆ 被害茎葉を早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 肥料切れしないように、肥培管理に注意する。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤等を散布する。発生を認めたら、リドミルゴールドMZ、アミスター20フロアブル等を散布する。

うどんこ病



うどんこ病*

特徴

- ◆ 施設栽培で、日照不足、乾燥時に発生が多い。
- ◆ 昼夜の温度差が大きくなると発生が多い。

防除のポイント

- ◆ 施設内の換気を良好にする。
- ◆ 被害葉を除去し、通風を良くする。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、ベルコート水和剤やフルピカフロアブル等を散布する。発生を認めたら、アフェットフロアブル、トリフミン水和剤等を散布する。

ワタヘリクロノメイガ（ウリノメイガ）



ウリノメイガ幼虫*

特徴

- ◆ 施設抑制裁培の生育初期に発生が多く認められる。
- ◆ 幼虫は葉をつづり合わせ、その中で葉を食害する。

防除のポイント

- ◆ 生長点を食害するので、幼虫を捕殺する。
- ◆ 施設の開口部を寒冷紗（2mm目合）等で被覆し、成虫の侵入を防止する。
- ◆ 発生初期にベネビアOD、プレバソンフロアブル5、デルフィン顆粒水和剤等を散布する。

ミナミキイロアザミウマ



ミナミキイロアザミウマ被害葉※

特徴

- ◆ 発生初期は、葉の葉脈沿いにカスリ状の白い斑点を生じる。
- ◆ ミナミキイロアザミウマは、キュウリ黄化えそ病等のウイルスを媒介する。

防除のポイント

- ◆ 施設の開口部を0.8mm目合いの赤色ネットで被覆し、成虫の侵入を防止する。
- ◆ 発生を認めたら、グレーシア乳剤、アファーム乳剤、ベストガード水溶剤等を散布する。

●病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>

●農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

黄化えそ病



キュウリ黄化えそ病被害葉

特徴

- ◆ キュウリ黄化えそ病は、メロン黄化えそウイルス（MYSV）によるウイルス病であり、きゅうり、メロン、すいか、しろうり、にがうり等に感染する。
- ◆ MYSVに感染すると、葉にえそ斑点を伴うモザイク症状や黄化等の症状を示す。
- ◆ MYSVは、ミナミキイロアザミウマによって媒介される。

防除のポイント

- ◆ MYSVを媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。
- ◆ 発病株はほ場外に持ち出し処分する。

コナジラミ類



コナジラミ類*

特徴

- ◆ タバココナジラミやオンシツコナジラミが加害する。
- ◆ 葉の汁を吸ってネバネバした液を排泄し、その上にすす病が発生するため、葉や果実が黒く汚れる。
- ◆ 多発すると株全体が弱り、収量も減少する。
- ◆ タバココナジラミは、キュウリ退緑黄化病のウイルスを媒介する。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、グレーシア乳剤、ベネビアOD等を散布する。

退緑黄化病



キュウリ退緑黄化病被害葉※

特徴

- ◆ キュウリ退緑黄化病は、ウリ類退緑黄化ウイルス（CCYV）によるウイルス病であり、きゅうり、メロン、すいか等に感染する。
- ◆ CCYVは、タバココナジラミによって媒介される。
- ◆ CCYVに感染すると、葉に退緑小斑点を生じ、次第に小斑点が増加・癒合しながら徐々に黄化する。
- ◆ キュウリ退緑黄化病と黄化えそ病は見た目で見分けることは困難である。

防除のポイント

- ◆ CCYVを媒介するタバココナジラミの防除の徹底が重要である。
- ◆ 発病株はほ場外に持ち出し処分する。

キャベツ

根こぶ病



根こぶ病によるしおれ症状と生育不良*

特徴

- ◆ 根に大小様々なこぶができる。発病が激しいと枯死する。

防除のポイント

- ◆ アブラナ科野菜の連作を避ける。
- ◆ 排水を良好にし、過湿を避ける。
- ◆ 石灰質肥料を施用して、土壌酸度をpH6.5～7.2に矯正する。
- ◆ 早植えを避ける。
- ◆ ネビリュウ、オラクル粉剤、ランマンフロアブル等を施用する。

●病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)

●農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

きく

黒斑病、褐斑病



黒斑病被害葉*

特徴

- ◆ 下葉から発生し、降雨によって感染が拡大する。

防除のポイント

- ◆ 被害葉は取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。
- ◆ 発生が見込まれる時期にダコニール1000、ストロビーフロアブル等を散布する。発生を認めたら、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤等を散布する。

注1) ダコニール1000は、花卉に薬液が付着すると漂白・退色等による斑点を生じる場合があるので、着色期以降の散布はさける。薬液による汚れが生じるおそれがあるので、収穫間際の散布はさける。また、かぶれに注意する。

注2) ストロビーフロアブルは、高温多湿下で薬害の恐れがあるので使用しない。また、他剤との混用は薬害が生じる恐れがあるので注意する。

白さび病



白さび病被害葉

特徴

- ◆ 施設では春先と初冬に、露地では初夏～梅雨時と秋期に発病が多い。

防除のポイント

- ◆ 施設では換気を良好にし、湿度を下げる。
- ◆ 被害葉は取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。
- ◆ 薬剤散布は葉の裏を中心に行う。
- ◆ 薬剤による防除では、予防的な防除が重要である。発生が見込まれる時期にハチハチ乳剤、ポリオキシシナL水溶剤等を散布する。発生を認めたら、ベンレート水和剤、トリフミン乳剤等を散布する。

アザミウマ類



ミカンキイロアザミウマ成虫※

特徴

- ◆ 品種により被害の現れ方に差がある。
- ◆ 花卉にはミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマ等が発生し、葉には主にクロゲハナアザミウマ等が発生する。
- ◆ ミカンキイロアザミウマはウイルス病（TSWV、CNSV）を媒介する。

防除のポイント

- ◆ ほ場内および周辺の除草を行う。
- ◆ きくの残さは放置せず、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 施設開口部に目合い0.8mmの赤色ネット又は0.4mmの白色ネットを展張する。
- ◆ 発生を認めたら、アファーム乳剤、グレーシア乳剤、スピノエース顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

●病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
(<http://www.jpnn.ne.jp/osaka/>)

●農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

野菜類・花き類

※適用作物は一部を抜粋して記載しています。
使用にあたっては、ラベルの登録内容を確認してください。

ハスモンヨトウ



ハスモンヨトウ幼虫

特徴

- ◆ なす科野菜、さといも等多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ 老齢幼虫の防除は困難なので、発生初期（若齢幼虫期）に防除を徹底する。卵塊や集団でいる幼虫の除去に努める。
- ◆ 発生を認めたら、トレボン乳剤（さといも、えだまめ等）、アニキ乳剤（さといも、なす、トマト、きゅうり等）、プレバソンフロアブル5（さといも、なす等）等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

ヨトウムシ類については「ヨトウムシ類の見分け方」をご参照ください。

http://www.jppn.ne.jp/osaka/color/yoto/yoto_l.pdf

コナガ



コナガ成虫 ※



コナガ幼虫 ※

特徴

- ◆ 主にアブラナ科野菜を加害し、葉を薄皮だけ残して食害する。
- ◆ 一部地域でジアミド系殺虫剤に対する抵抗性が生じている。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、ディアナSC（非結球あぶらな科葉菜類等）、デルフィン顆粒水和剤（野菜類）等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

アブラムシ類



ワタアブラムシ※

特徴

- ◆ 作物を吸汁し、生育を阻害する。また排泄物にカビが発生し、すす病の原因となる。さらに、各種のウイルスを媒介する。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、コルト顆粒水和剤（なす、きゅうり、トマト、花き類・観葉植物等）、スタークル/アルバリン顆粒水溶剤（なす、きゅうり等）、ウララDF（なす、きゅうり、トマト、非結球あぶらな科葉菜類等）等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

● 病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。

(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)

● 農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。